

「環境ノイズエレメント」に見る 風景の加工性についての研究

研究年度・期間：平成15年度

研究ディレクター：宮本 佳明
(建築学科 助教授)

共同研究者：狩野 忠正 田端 修
(環境デザイン学科 教授) (建築学科 教授)

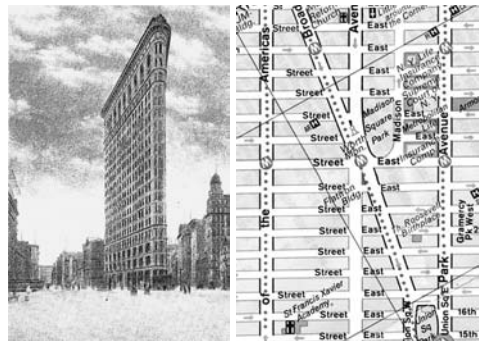
研究助言者：阿部 仁史 千葉 学 塚本 由晴 中谷 礼仁
(東北大学建築学科 教授) (東京大学建築学科 助教授) (東京工業大学建築学科 助教授) (大阪市立大学建築学科 専任講師)

研究補助者：辻岡 美穂
(宮本佳明建築設計事務所 研究員)

はじめに

都市計画という言葉が示す通り、都市は通常「計画」にもとづいて建設されてきた。しかし結果的に見ると、現実の都市はさまざまな要因によってオールマイティな単一の計画によって達成されてはいない。たとえば地形といった自然物や土木構築物あるいは過去の都市計画といったものが、その堅牢性や社会的長寿命性ゆえに現代の都市計画に異物感やより具体的に障害や影響を与える。その結果、本来「計画」が志向し、誘導しようと試みた風景の秩序に「ほころび」が生ずることになる。ここでは、そういった空間的に現象した計画の「ほころび」のことを、「環境ノイズエレメント」と呼んでいる。

たとえ理想的に計画されたはずの新大陸の植民都市であっても、環境ノイズエレメントを発見することは可能である。一例をあげると、ニューヨークのブロードウェイは、グリッド都市マンハッタンに無数の鋭角のエッジを発生させているが、元はというとマンハッタン島の微妙な尾根筋をトレースするように自然発生したインディアンの踏み分け道である。そしてそれが結果的に「フラットアイアンビル」(1902年、ダニエル・パーナム設計)といった異形の建築を生み出すことで、均質になり勝ちなグリッド都市の景観にある種の豊かさを与えている。あるいはまた、大規模な土木造成工事によって生み出された須磨ニュータウンの(物理的にも)フラットな風景の中に、酒鬼薔薇事件で知られるようになった「タンク山」だけが唯一削り残されたオリジナルの自然地形としてぽっかりと浮んでいる(*1)。それは名前が物語るように、上水道のための配水タン



フラットアイアンビル

【出典】パース：レム・コールハース 『錯乱のニューヨーク』
(鈴木圭介訳、ちくま学芸文庫、1999)

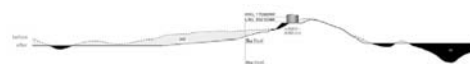
地図：『WORLD-CITY MAP 1 : 15000 New-York』(GeoCenter)

クが載っていたという単純な理由で仕方なく削り残されたものである。そこに酒鬼薔薇クンはむしろ感覚地理的な暖かさを感じ取っていたという(*2)。

つまり環境ノイズとは、計画と計画、あるいは計画と自然との間のさまざまな矛盾によって発生する感覚的な雑音(ノイズ)のことである。ノイズによる都市とは、新しい計画と古い計画あるいは計画と計画をよせつけないものが衝突した「事故」現場であるといえるかもしれない。

環境ノイズコンセプトの射程

環境ノイズエレメントは、確かに風景の「事故」現場かもしれないが、それをポジティブな「事故」現場ととらえることも可能ではないだろうか。つまりそれは、オールマイティな単一の計画では得難い風景の多様性がもたらされる可能性を示唆している。先に挙げたタンク山を例にとると、計画的にゾーニングされた違反のない街に特有の、スケール感、形態、素材感といった空間の情報量の少なさに起因する風景の均質さ　つまりそれがニュータウンの「感覚地理的寒さ」である　の中に育った酒鬼薔薇クンは、自前の「暖かい」居場所としてタンク山を発見した。宮台真司は、やはり多摩ニュータウンを舞台とした島田雅彦の小説『忘れられた帝国』に寄せたあとがきの中で、タンク山を「すべてが機能的にゾーニングされた中で、ここだけが用途不明な《あいだ》であり、ニュータウン全体の「屋上」に相当する場所だった」と書いている。それはニュータウンの子供たちが、空間の均質化すなわち《あいだ》の物理的消去に抗して、新たな地理感覚を獲得することによって発見し得た場所なのだ。さらに宮台は著書『透明な存在の不透明な悪意』の中で、「ダークサイドが消えた均質空間では、ダークサイドは心の中に移転する」ゆえに「本当は、タンク山のような場所がニュータウンには、もっともっとたくさんなきゃダメなんです」と、はっきりとニュータウン設計者の責任に言及しつつ計画の失敗を指摘している。これら一連の論考の中では一貫して、平穏無事な「通常性」を守るために「非通常性」を隔離することが、結果的に社会の不透明性を上昇させることの危険が論じられている。「非通常性」が物理的な空間として現象したものがまさに環境ノイズエレメントである。



タンク山

【写真】航空写真：兵庫県労働者住宅生活協同組合中央写真 2 点：『あすへ友が丘』（北須磨団地自治会、1982）

より卑近な水準でいうと、環境ノイズエレメントは明らかに風景にアイデンティティを付与し、場所のイメージアビリティを高めることに貢献しているといえる。建築や風景は、たとえ文化財的な価値を持たなくとも、常に個人にとっては記憶の器としての側面をもつはずである。なぜならば「記憶とは、脳内だけに存在するものというより、脳に残る痕跡と環境、身体といった外部装置との相互関係そのものである」(*3)からである。場所の記憶があつてはじめて「このまちが私のまちである」という感覚がもたらされる。だとすれば、その記憶をもたらす源泉である風景の均質化とは、すなわち「私」の存在感の希薄化を意味することにならないだろうか？

これらの課題の克服にこそ、環境ノイズというコンセプトの、具体的な「計画」へと向けた有効射程がある。オールマイティな計画が有効でないという現実が目前にあり、むしろ逆に環境ノイズエレメントの積み重ねこそが真の都市の歴史であるとしたら、環境ノイズを確かに聴き取る能力＝リテラシーを身につけることは、私たちが都市や建築をデザインするにあたって有効なパラメータをひとつ増やすことを意味するのではないだろうか。

環境ノイズエレメントとしての要件

リストアップされた200件あまりの環境ノイズエレメントは、もともとはほとんど無根拠に直感に基づいてコレクションされた異物群である。しかしそれらについて事後的に注意深く観察してみると、おおよそ次のような共通の条件を有していることが明らかになった。

1. 複数の異なるフェーズの元で生成した空間が重層して結果的にひとつの空間が成立すること、すなわち空間の書き重ねによって2次的に発生したエレメントであること。
2. その結果として、環境の作品化（すなわち異化）が成立していること。

つまり、あるオブジェクトがいかに奇妙な形を晒していたとしても、それだけでは環境ノイズエレメントとは見なされない。あくまで2次的に異化が成立していることが要件となる。そこでそういった2次的に生ずる異化作用をより効果的に説明するために、環境ノイズエレメントを 素材性 と 加工性 というふたつの分類軸によって整理した。なお今回の連載では、一部の参考事例を除いてエレメントを国内のものに限定している。

素材性について

素材性とは、環境ノイズエレメントを構成する物理的なマテリアルの供給要因に基づく分類のことである。A.自然物（主に地形）B.土木構築物（文化財系）C.土木構築物（非文化財系）という3項目に分類している。地形や土木はその大規模性と堅牢性において、文化財、中でも宗教的事物はその不可触性において残存可能性の高い素材であるといえる。ここでいう素材性は、レヴィ＝ストロースがブリコラージュ論のなかで「事物の潜在的有用性」という意味で用いた「資材性」という概念に近いものである。

加工性について

加工性とは、ノイズの発生に当たって素材に対して物理的に施された操作に基づく分類のことである。

1. トレース 2. 切断に大きく二分される。ここでいうトレースとは、直接的には既存素材の外形を「なぞる」ことによって形態が新素材にコピー（転写）されている状態をいう。転写には順転写（＝いわゆる転写）と、ネガポジが逆転する逆転写とがある。DNAの自己複製（転写）やRNAからDNAへの逆転写のイメージである（*4）。あるいはエレメントによっては「撫でる」という語感が近い場合もある。この場合、都市的規模でのフロッタージュが行われていると考えれば分かりやすい。トレースのうち特に、現存しない、過去のあるいは未完の形態が現存している事物によってイマジナリーに浮かび上がる状態を、ゴーストと呼んでいる。さらにトレースのうち、素材がそのまま形態の変化を伴わずに再利用されると転用（コンバージョン）ということになる。そして切断は最も加工性の高い環境ノイズエレメントを生み出す。既存素材そのものに直接的な形態の減築的变化が生じている状態が切断である。

加工性 素材性	トレース	⇒ 切断
A. 自然物 (主に地形)	A2	A3 #2
B. 土木構築物 (文化財系)	B2	B3 #3
C. 土木構築物 (非文化財系)	C2 #4 #5	C3 #6

Fig. 素材性×加工性に基づく分類

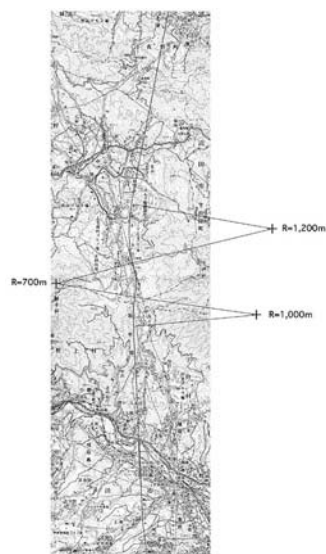
「素材性×加工性に基づく分類」各ゾーンの代表的事例について解題してみることにする。ちなみにフラットアイアンビルはC2、タンク山はA2に分類される。

ケーススタディ

「素材性×加工性に基づく分類」各ゾーンの代表的事例について解題してみることにする。ちなみにフラットアイアンビルはC2、タンク山はA2に分類される。

A1 上越新幹線中山トンネル出水事故現場W字カーブ（群馬県小野上村～高山村）

既存の地形や地質は、道路や鉄道をはじめとした線のインフラの建設にあたって強いバリアーとして働く。それに対しては当然サイトスペシフィックな対応が取られる。上越新幹線中山トンネルは全長1万4857mの長大トンネルであるが、東京から新潟に向かうと新幹線は中山峠の真下あたりで突然減速し右左右と都合3回カーブを切る。これは工事中2度にわたって発生した大出水事故の結果、工期を優先してやむをえず大出水箇所を迂回する（つまりはトレースする）形でトンネルを貫通させたことによるものである。こういった地質構造が地上に露頭したものが、つまり「地形」である。



上越新幹線中山トンネル出水事故現場W字カーブ

【出典】地図：1/5万地形図・中之条、国土地理院、H10発行

B1 新吉原遊廓クランク、遊廓断層(台東区)

現在もソープ街として賑わう新吉原では、悪所への結界を示すクランクが平面的に残るだけでなく、かつて廓を取り囲んでいた堀を埋め立てた跡には、廓の内外の高低差がそのまま断層状に露呈している。

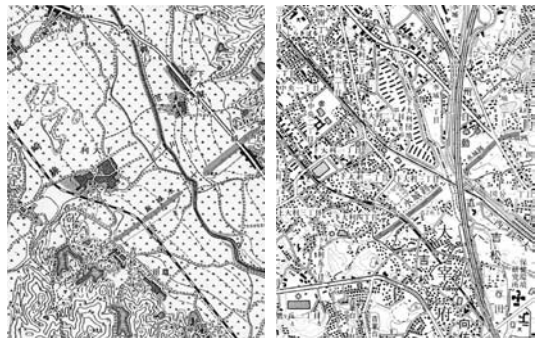


新吉原遊廓クランク、遊廓断層

【出典】新地図：1/1万地形図・上野、国土地理院、S59発行
旧地図：1/1万地形図・上野、大日本帝國陸地測量部、M43発行
写真2点：筆者撮影

B2 国道3号線九州縦貫道西鉄大牟田線「水城」横断(太宰府市)

水城とは唐新羅連合軍の侵攻に備えて7世紀後半に築造された防塁である。現在も御笠川をつくる細長い平野を堰き止めるダムのように1.2kmにわたって直線状に横たわっている。したがって侵略者と同じように平野を遡ってきた鉄道や道路にとって一大障害物となる。比較的初期に建設された現JR鹿児島本線と旧国道3号線は躊躇なく水城を開削切断して通過したが、水城が史跡として認識された後に建設された西鉄大牟田線、国道3号線バイパス、九州縦貫道はいずれも防塁としての水城の最大の弱点でもあった御笠川沿いに殺到し、河川空間を上手く利用して水城を突破している。その意味で、むしろ河川のトレースであるともいえる。



国道3号線九州縦貫道西鉄大牟田線「水城」横断

【出典】新地図：1/2万5千地形図・福岡南部、国土地理院、H11発行
1/2万5千地形図・太宰府、国土地理院、H10発行
旧地図：1/2万地形図・春日、大日本帝國陸地測量部、M32発行

C1 千里ニュータウン上新田地区(豊中市)

高層ビルが建ち並び今や大阪の副都心となった千里中央地区からいきなり鬱蒼とした竹藪に囲まれた昼なお暗い小道を下ることわずか5分で、桃源郷かと目を



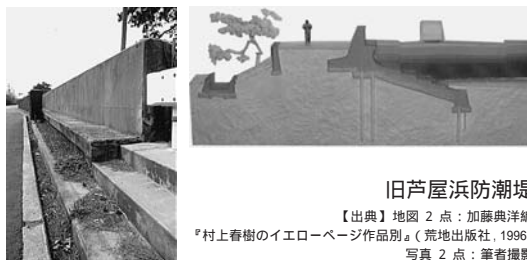
千里ニュータウン上新田地区

【出典】写真2点：筆者撮影

疑う農村風景が出現する。千里ニュータウンの建設にあたって事業主体である大阪府は、計画区域の中央に位置する上新田地区の買収に失敗する。その結果、中心に「村」を内包したままのドーナツ型のニュータウンが誕生した。つまり千里ニュータウンは「村」の逆転写として生まれたものである。それは「村」が「郊外」と衝突しやがて調停されていく過程と、それに伴う多層的な風景を見ることができる現場である。

C 1 旧芦屋浜防潮堤（芦屋市）

高潮対策のために建設された芦屋浜防潮堤は、ASTMの高層住宅が建ち並ぶ芦屋浜の埋立てに際して撤去されることもなく半ば以上埋まった状態でガードレールに転用され、そこがかつて海岸線であったという風景の記憶を今に伝えている。地盤沈下に伴い現役時代に施工された嵩上げ工の結果、新旧ふたつの防潮堤がもたれ合った様は合掌のようでもある。海側に新設された車道と元の管理用道路を転用した歩道を隔てる「ガードレール」部分は実は氷山の一角であり、地中には巨大な構造体そのまま眠っている。芦屋出身の作家村上春樹は『羊をめぐる冒険』のなかで、主人公の「僕」に「不思議なことに古い防波堤はまだ残っていた。海を失った防波堤はなんだか奇妙な存在だった」といわせている。



旧芦屋浜防潮堤

【出典】地図 2 点：加藤典洋編『村上春樹のイエローページ作品別』（荒地出版社、1996）
写真 2 点：筆者撮影

註

- * 1 拙稿「須磨ニュータウン 全地球上で最も抽象的な都市」（『建築MAP大阪/神戸』TOTO出版、1999）
- * 2 宮台真司『まぼろしの郊外』（朝日文庫、1997）
- * 3 鷲田清一（朝日新聞）
- * 4 ただし分子生物学の用語としての「転写」「逆転写」の正確な意味とは異なる。